野村生涯教育だより

No. 432

発行所
公益財団法人 野村生涯教育センター
東京都渋谷区代々木 1-47-13 〒151-0053
TEL 03-3320-1861　FAX 03-3320-0360
URL www.nomuracenter.or.jp

(公財) 野村生涯教育センターの
シンボルマーク
[n] は、名称「Nomura」と、
基本理念「自然観 = Nature」の
頭文字を表している。

もくじ

● 創立六十周年に向けて
● 幼児教育部　夏の勉強会
● 触れ合う条件から自己教育

埼玉県秩父市のイチョウ並木

創立六十周年に向けて

当センターは二〇二二年三月四日、創立六十周年を迎える。

一九六〇年代初頭、青少年の不幸の問題を動機に、創設者 野村佳子初代理事長が教育の抜本的問い直しをはじめ「人間性復活」を教育の根底に据え、自己教育を主軸とした相互教育を国内外で推進してきた。

メンバーは、創立六十周年に向けて、その歴史の意義を噛みしめ、どのようにこの学びを受け継ぎ、そして継承していくかを課題とし、改めて自己の学びをふり返っている。

広島支部責任者　石川弘子

四月一日、公益財団法人設立記念日を祝う会がオンラインで行われました。私は、三月三十日にセンターの草創期から学んでいた母が九十二歳で他界し、葬儀のため参加できませんでした。その後、草創期を母と共に過ごされた先輩が当時について情熱をもって発言されたことを仲間から聞き、改めて六十年という歴史の重みを感じました。

また、先日広島支部の九十歳になられる前責任者から「私はこの学びをすれば必ず幸せになれるという確信があったのよ。創設者の説かれることに心からそう思ったの。だからどこへ行くにもセンターの資料や講演会のご案内を持って、電車やバスで隣に座った人に声をかけずにいられなかったのよ」との話を伺う機会を得、その貴重さを思い感動しました。

その後、私は十月に行われた全国講座で講師の役をいただき、自分をふり返りました。

二年前に長男夫婦の不調和が明らかになり、息子の問題を解決したいと思っていた私は、五月にオンラインで行われた支部・連絡所活動報告会でそのことを発言すると、金子理事長から「自分の課題にしていませんよ」と言っていただきました。また、日頃私の大変さを副責任者にわかってもらえないと感じ〝喧嘩になってしまう〟と話すと「責任者だから、自分が一番大変というのは違います。石川さんの話を聞いていると、大変さを役の大きいとか、小さいとか、作業量の多さなどで段階をつけているように聞こえますが、その考え方は違うと思います。私は、自分が一番大変だとは思っていません。皆さん、それぞれにそれぞれの大変さがあると思っています」と言っていただき、自分の側からの視点だけを主張する自分に気づき、そのことを夫に話すと、私と息子はそっくりだと言われ、そうした態度を長男の姿に見ていましたが、自分自身の姿を映していたことがわかりました。

また、七年間父の介護をしていた時の苦しかったことを思い出し、当時、妹たちと順番に実家に泊まり、介護をしていましたが、支部講座での講師の役と私の介護の順番の日が重なり、自分の気持ちは言わずに妹に父の介護を代わってもらいました。妹たちから「父に対して冷たい」と言われ、責めを感じ、姉妹で喧嘩になっていました。そのことを理事に話すと「妹さんたちは『よろしくね』『ありがとう』というあなたの気持ちが欲しかったのではないかしら？」と言ってもらい、自分の役のことで精一杯で、相手の大変さを思う気持ちになれなかったことをわからせてもらいました。

また、理事に両親との関係で傷になっていることはないかと訊かれ、探ってみると、母のことが思い出されました。母は戦後、十八歳の時に家族と台湾から引き揚げ、戦後の混乱期に父と結婚し、戦争孤児となった父の兄の子ども二人を引き取り、そして生まれた私たち兄妹四人を育てました。父は生活費を稼ぐため出張を引き受け、休みの日は石鹸を売り歩き、母は子育てに追われ必死に生きてきたと聞いています。そして私の兄が中学生だっ

た一九六〇年代、広島県でも青少年の非行問題が多発し、母は子育てに悩んでいた時に創設者と出会いました。

私が大学生のときに両親の夫婦関係が悪くなり、そのときの母は苦しみ荒れていて、その母の姿を見るのがとても辛く怖かったことを思い起こしました。今まで何度もこのことを聞いてもらってきたので、気持ちを切り替えられたと思っていましたが、未だに残っているのだと認識出来ました。そして、母の激しさは両親が愛し合っているが故の激しさであったのではないかとの理事の言葉に、そうかも知れないと感じました。そして当時私は、母は父と別れた方がいいと思っていましたが、母は創設者に指導をいただきながら、自己との熾烈な闘いをし、この学びを離さず最後まで添い遂げました。そういう学びを私に受け渡してくれたのだと思いました。

講師の役を通して、長男の問題をどうにかすることしか考えていなかったことに気づきました。この問題を条件として、夫婦間の相剋が如何に苦しいか、そして、その相剋で子どもたちがどんなに辛い思いをするのか、両親を理解しようとすることが息子の苦しさを受け止めることに繋がることをわからせていただきました。

生前母は私たち三姉妹に「この学びは暗闇を照らすカンテラで、このカンテラさえ持っていれば生きていけるのよ」とよく話してくれました。また、以前、母や先輩方に広島支部の歴史を聞く機会があり、その時に母が「それまで家庭教育という枠で学んでいたけれど、創設者に出会い『生涯教育』というスケールの大きい話に衝撃を受けたのよ。そして『人間の位置づけ』を学び、家庭教育は実践の場として自分をつくり、その自分には未来へバトンを渡していく責任があり未来の鍵を握っている、と聞いて身体中に電流が走ったの！」とまるで今、創設者から話を聞いたかのように生き生きと語ってくれました。

母が学び始めた一九六〇年代と今と時代背景は違いますが、世界では今も戦争があり、さまざまな社会問題や、足もとでは夫婦、親子間の問題が深刻さを増しています。そして今はコロナ禍で、ますます先の見えない厳しい時代です。この学びは母が言っていた〝カンテラ〟なのだと感じ、私にとって必要であり、ますます今の時代に必要だと実感しています。

創立六十周年に向けて、母から受け継いだバトンをしっかり受け止め、次世代へ繋げていくために今までのプロセスの確認をし、自己を知ることを目的に学んでいきたいと思います。

幼児教育部
夏の勉強会

幼児教育部は夏の勉強会を、八月十九日（木）、二十二日（日）に行った。東京、神奈川、千葉、埼玉、群馬、山梨、静岡、奈良、兵庫の幼児部の母親と修了生の母親十五名、幼児十一名とその兄弟姉妹十六名が、今年はオンライン方式で参加した。

一九七〇年から三十回を重ねた生涯教育全国大会では、幼児教育部、児童、青少年、青年のプログラムを通して、子どもたちは全国に仲間や友だちがいる感覚を培ってきた。創設者がそうした機会を設けて下さり、子どもたちに、人と人の繋がりの大切さを感じ取れるようにと、代々の先輩方が願いを持ち継続してきた思いを、現在の幼児教育部の母親たちにも受け継いでもらいたいという本部の願いのなかで、青年部スタッフや母親たちにその動機が生まれ、一昨年まで全国青年部・幼児教育部合同夏合宿を行い、子どもたちは毎年全国の仲間と会えることを心待ちにしていた。

しかし、昨年は新型コロナウイルス感染症拡大予防のため合同合宿は自粛とした。今年、変異株の感染拡大による緊急事態宣言の発出下、幼児教育部の通常の活動も自

粛せざるを得なかったなか、本部から「全国講座をオンラインで開催しているように、幼児教育部もオンラインでやれることがあるのでは」との投げかけを受け、電話やオンライン会議を通して、足もとの家のこと、子どもの学校のことなどを話し合ってきた。夏の勉強会についても、話し合いを重ねた。オンライン方式ならば、全国の幼児教育部の母親たちとも一緒にできるし、児童の母親たちにも呼びかけようとなった。

テーマについては、異常気象やコロナ禍、自分の生き方を見直し皆で身近にある危機をリアリティを持って感じ取り確認し合おうと意見が一致し、そこで金子理事長の「年頭にあたって」（以下「年頭言」）をテキストに学び合うことにした。また子どもたちにも、皆で顔を会わせる場を設け、その後母親たちの勉強会に入ることにした。

子どもたちは画面越しに向かい合うと少々緊張気味で、言葉は少なめではあったが、久しぶりに友だちと会い嬉しそうな表情を見せ、夏休みをどのように過ごしているか、宿題のことなどを話し合った。

その後、勉強会に入った。母親たちも久しぶりの再会を喜び合い、近況と共に年頭言から学んだこと、感じたことを出し合った。

Sさん（静岡）は「新型ウイルスのことも怖いが、七月に静岡の熱海で起きた土石流とその被害が、他人事ではないと思った。盛土の問題から、自分たち人間が作り出したものが被害を大きくしていることをリアルに感じた」と話すと、静岡幼児教育部担当のTさんは「年頭言に『人間一人ひとりがいかに多くの関わりをいただき、いかに親、他者、社会、大自然といったものの無償の奉仕の中に生かされているか』とあるが、私は〝こんなにやっている〟という気持ちが強く、やってもらっているほうが見えないでいた。七月の支部講座で講師の役をいただいたとき、講座の前日に原稿をパソコンで打ち終え、保存しようとして間違えてデータを全部消してしまった。支部の先輩から、その時の意識はどうだったか問われ、夫が家のことを何もやってくれないから私が大変だという気持ちでいたことを聞いてもらった。その後、このことを知った夫が『大丈夫か？　夜の家事は手伝うぞ』と言ってくれて、夫の見方が違っていたと気づくことができた。自分ひとりではできなかった原稿も夫に助けてもらい、無事に打ち直して講座に間に合うことができた。このことから繋がりの中に生かされて在るのだと実感した」と発言した。

幼児部責任者のJさんが「私たちはどうしても上の子どもたちに『宿題やったの？』と口うるさく言ってしまう。担当理事補佐から『宿題は本人の問題。やろうとしない子を見てイライラするのなら、そこを課題にすることでしょう』と言われている。私はなぜ子どもに言いたくなるか考えてみた。子どものためだと言いながら、実は、自分が安心したいからだと気づき、反省した」と話し、それに共感する声が多く上がった。

二日目は、本部より幼児教育部担当の坂本麻子理事補佐が出席し、前日に続き話し合いが行われた。

はじめに前幼児部責任者のUさん（東京）は「早くコロナが去って安心したいという気持ちが出てくるが、先日朝礼で金子理事長が『こうしたら安心というものはもう無い時代になっている。そういった意識を転換することが大事だ』とおっしゃったのを聞き、自分の考えの甘さにハッとした」と話すと、Yさん（神奈川）が「Uさんから金子理事長の言葉を伺い、私もハッとした。コロナ禍で育児に疲れたと捉われて、心が動かなかったが、こうして画面上で顔を合わせ、皆さんと話しができて、捉われている気持ちが薄れていくのを感じている」と話した。

先輩のTさん（東京）は「社会には深刻な問題が山積し、足もとの家庭では夫婦、

親子間の葛藤もある。どうすればいいのか答えが欲しくなってしまうが、意識が環境を作ると学び、自分の気持ちと向き合い、葛藤することは大事だと学んだ。自分と向き合うことから自分を知る。そうしたことが自分の触れている環境に繋がっていくのではないか」と発言すると、Mさん（群馬）は「一昨日緊急事態宣言が出された。夫と共に旅館で働いている。国からの補償が無く営業を続けることに不安を感じ落ち込んでいたが、Tさんのお話から、苦しいけれど、葛藤のなかで自分の意識を見つめることが大事なのかもしれないと思えた」と発言した。

Hさん（千葉）は「娘が宿題をやらないことばかりに捉われ、なかなか変われないでいる。子どもにも感染が広がる中で、また、来週から学校が始まることが不安で、恐れるだけになっている。自分の課題は何だろうか」と発言すると、Tさんが「私も息子が宿題をやらないことから、先輩に『子どもは親の姿を映す鏡です。あなたは今やらなければならないことをやっているの？』といつも問われ、その度にやらなくてはと思いながらやっていないことがたくさんある自分に気づいた」と話し「皆さんはどうですか？」と投げかけると、心当たりがある母親が多く、親の側が課題にし、変わる努力を自分に課す大事さを話し合った。

Oさん（埼玉）は「私は我慢して節約しているのに、夫が次々物を買うので困っていた。年頭言で『足るを知る』ということが心に残り、もっと欲しいという欲は私にもあるし、今あるものに感謝が無いと思った」と話すと、Uさんが「もっともっとという意識を物を買うことだけで考えていないかしら？　一緒に学んできて、Oさんは皆に対して『もっとわかってほしい、もっと認めてほしい』と言っていたよ。私は昨年実家の問題を通して、両親や兄姉との関係を理事に聞いていただいた。両親の介護を実際にしてくれている兄や姉の大変さも理解しないで自分の目線で『足りない』と見て批判し『もっともっと』と要求している自分に気づかせてもらった」と発言すると、Oさんは「私も自分を見てみると、私には姉と弟がいるので真ん中の私は、母を独り占めしたい、自分だけを見てほしいという思いが子どもの頃から強いと思う。自分の気持ちが見えてきて少し楽になった」と話した。

Wさん（千葉）が「コロナ禍で実家に帰れずにいる。今まで皆から『実家に帰りたくないの？』と何度投げかけられても、そうでもないと返してきたが、本当は帰りたくて仕方が無く、母親に会いたい自分に最近気づいてきた」と話すと、皆から「関わりをもらって本当の気持ちに至れたのがよかった」「会いたい気持ちをお母さんにもご主人にも話せると、今は直接会えなくても、気持ちが楽になるのでは？」と助言を受けた。

最後に坂本理事補佐が「こうした繋がりの中で、それぞれが今まで見えなかった自分の気持ちが見えてきたことは本当に良かったと思います。今まで当たり前のように会えていたことが叶わない状況の中で、このような形で勉強会が持てたことが感謝ですね」と述べ、二日間の勉強会を終えた。

触れ合う条件から自己教育

群馬支部　永田貴子

私は現在中学校で教員をしています。育児休暇中に全国講座で学び始め、一年前に職場復帰してからも受講を続けています。全国講座では、子どもを連れて参加している幼児の母親たちが当番制で子どもたちを預かり、子どもの姿を通して親が学んでいます。私は受講し始めた当時、次男を連れて通っていました。公園に遊びに行ったとき、次男が土を口にしました。「この子変なんです。長男はこんなことしなかったのに」と話すと、先輩から「まだ一歳なのだから、何でも口に入れたりするよ」「いつも長男と比較しているよ」と言われ驚きました。自由奔放で私の言うことを聞かない、と次男に怒ってばかりいましたが、通う中で次男は自由でのびのびしている子なのだと、長男、次男それぞれ良さがあると見方を変えさせてもらいました。

昨年八月末、コロナ禍での職場復帰となり、現在私は中学一年生の担任をしています。学校の様子は大きく変わりました。先日、緊急事態宣言に伴い、中止となった高原学校に代わる体験学習にバスで出かけました。ワクワクした気持ちの生徒たちは嬉しくなって車内で歌を歌い始めましたが、それは感染対策上してはいけないことなので注意しました。友だちと手を繋いだり、肩を組んだり、人として当たり前の触れ合いでも注意しなければならないことが本当に辛いですが、ウイルスの変異株は、十代の子どもたちにも感染リスクが増えていることから、感染防止策はやらなければならないことであり、そうした中でセンターで学び、コロナ禍でもやれることを考える日々を過ごしています。

今年六月、校長先生との面談のときに、私が受け持っているクラスのAくんに対する指導を何もしていないと言われたように感じ、重たい気持ちになっていました。そのことを群馬支部の先輩に話すと「校長先生に真意を伺ってみたら？」と言ってもらいました。思い切って伺うと「永田先生がA君に対してひとりで頑張っているので、学校全体で一緒に考えていこうという意味だった」と話してくださいました。私が思っていたことと真逆だったので、驚いたと同時に安心しました。

七月の全国講座で、理事長に校長先生との一件を話し、そして「A君のことをどう課題にしたらよいか」と質問しました。A君は授業中何もしない、給食も食べない、掃除もしないのですが、私とは楽しそうに話をすること、家でゲームをしていることを話すと、理事長は「学校をベースとして考えると何もしていないかもしれないけれど、家でゲームもするし、永田先生と楽しそうに話しをしているじゃない？」と言ってもらい大変驚きました。何もしない子と見るのは自分の見方だったのだと気づきました。そして理事長からA君をもっと知ろうとすること、他の先生方と共有することを言ってもらい、A君が何を考えているのか、気持ちを聞くようにするとA君のことを問題と感じなくなってきました。

七月中旬に群馬講座の講師の役をいただいて、今までのプロセスをふり返りました。全国講座で理事長から指導をいただいて生徒を見る見方が変わり、私の意識が変わることで環境が変化することを確認でき、私の意識がどう在るかが大事なのだと実感しました。その後、A君と保護者、校長先生を交えて四者面談することになり、ご両親と話し合うことができました。そして、校長先生にセンターで学んでいることをお伝えすることができ、管理職の先生とも共有していただくことが出来ました。そして、A君は先生方や生徒たちから声をかけられることが増え、挨拶もするようになり、補習も頑張っていたので、声を掛けると「約束したから」と話していました。

これからも触れ合う条件を通して、親として、教師として関わりをいただきながら自己教育をしていきたいと思います。